

釣れ釣れなるままに

2005年思い出の釣行記 PART. 4

徹夜に徹する

鹿島釣狂

岩見沢釣遊会第4回大会

☆開催日	平成17年7月3日			
☆開催場所	歌別川～岬港			
☆入釣場所	沖の島			
☆釣果	アブラコ	381	mm	4
	カジカ	314	mm	1
	重量	275	0g	
☆成績	合計点数	970	点	
	順位	7	位	
	成績	6	点	
	累計点	17	点	(2726)

沖の島

いつもは仕事の調整がつかなく、大会参加申込締切日に事務局のあるカナダ屋に連絡を入れているのだが、今回は端から参加するものと決めこんでいたので連絡を忘れてしまった。出発日にエサの買い出しのためにカナダ屋で物色していると大前事務局長とぼったり

出会ったところで初めて気がついた。事務局長にはいつもハラハラさせてばかりで面目ない。

イカゴロは何回かの釣行で使い残した60本が冷蔵庫の冷凍室いっぱいになっていたのでそれを使うことになる。再冷凍したので提灯状になって袋が破れないかが心配である。イカゴロ80本程が収まる蓋付の小さなバツカンを購入した。大きい方のバツカンにはイカゴロ、コマセ、身エサがピタッと収まるようになった。私は釣り場にゴミになるようなものは極力持ち込まないようにしている。特に袋物は袋から出してビニルバケツやタッパに入れておく。袋は風で飛ぶ恐れがあるからだ。発泡スチロールも然りである。コマセを入れていったバケツは審査用にもなるのだが、蓋がついていなくて雨降りにはコマセがドロドロになるので蓋付が必要である。バツカンにビシッと収まるものを捜し出したい。

入釣場所は決まっておらず、いつものようにバスの中での情報収集となる。この界限では私の定番が東歌別になってきたが、ここは6月の早い時期に釣果があがる。例年の7月大会成績で見ると、魚は温かい海を嫌って深場に移っていくので、歌別の浅海よりはエリモ岬方面のドン深の磯に分があるようだ。今年は寒い日が続く、海水も温まっていないことが予想されるがどうであろう。本日は西東洋エンドモ岬に狙いを定めている仲間が多い。西東洋には島氏が得意とする沖の島がある。エリモ第7前の離れ岩に向かおうとしている島氏を無理矢理誘惑し、入釣場所は沖の島に決定した。



潮を漕ぐ

0時半、キャスターに荷物を積み込み、沖の島に向かうだらだらとした長い坂を下っていく。上り坂になる帰り道を喘ぎ喘ぎ上ってくるような大釣りができるといいが・・・。

沖の島は潮が込んでおり、干潮待ちの釣り人4名が先に入っている。左方向に金漁会の2名、右方向に潮鱗会の2名である。本日の潮では5時頃に沖の島に渡れるようになるだろうということである。

島氏と共に坂を下りた所で竿を出す。一応舟揚場になっているようである。磯際は砂地なのでアカハラを期待して二人してゴロを打ち続けるが、それらしいアタリは全くないまま明け方を迎えた。

4時になり、潮の動きと共に人の動きが出て来た。潮鱗会の2名が沖の島に向かって潮を漕ぎ始めたので、その後ろに立って海面下にあるだろう通り道を確認する。二人は背中のリュックの底を海水に浸けて、腹までの潮を漕いでいき、最初の出岬に乗り、早速、アブラコの40cm程のものを抜き上げた。少し遅れて金漁会の二人と私たちが同時に渡った。金漁会の二人は更に奥の出岬に向かうために沖の島の真ん中にある深い溝を渡ろうと、足

がかりとなる海中岩を探している。竿で何度も昆布を浚^{さら}っていたが、40分も過ぎた頃だろうか、振り返ってみると沖の島の最先端で荷物を下ろしているところであった。どんなところを渡ったのかと行って見ると、深く抉れた溝に潮がドットと流れ込み昆布を大きく揺らしている。それを見ただけで足下^{すく}が竦み背中にゾクッと悪寒が走った。

私と島氏は安全を確認し、その溝の手前の少し下がった岩で荷物を下ろした。目の前の昆布やホンダワラの林の中に仕掛けをぶち込む。しばらくして、ようやく30cm程のカジカが海藻の密林から抜けてきた。海藻の抵抗で大物の予感がしていたので少々ガックリであるが、本日初めての獲物である。大切にバツカンに仕舞った。

執念の粘り

6時半、潮がさらに引いてきたので、島氏の右の低い盤に移動する。獲物はまだ小カジカ1匹である。しばらくして遠投していた竿にゴツン、ゴツンとしたアブラコ独特のアタリが出る。ソレッとばかりに竿を煽るがすっぽ抜けてしまった。あわてて同じところに打ち込むと、すぐに同じようにゴツン、ゴツンとアタリが出て、一呼吸おいた後、ゴツーンと竿を引き込んだ。40cm程のアブラコであり、ようやく魚らしい魚を手にした。続けて、体全体を派手な婚姻色に染めて35cm程のアブラコがきた。アブラコ30cm、ハゴトコ25cmと、型が尻すぼみになってきたので、またまた、金漁会の二人が去った出岬に移動する。魚はもう残っていないだろう。沖は砂浜なので、近投だけにする。予想通りハゴトコのみで大物は金漁会の御仁が浚^{さら}っていったようである。

締め切り時間を迎えたので、私は片付け始めたが、島氏がいつまでも粘っている。島氏を残して沖の島を後にした。私は締め切り時刻10時に1・2分残してやっとの思いで到着した。全身汗だくである。後を追いかけるように、金漁会、潮鱗会の御仁もやってきては東洋のバス停に向かっている。私たちは西東洋への脇道までバスが迎えにきてくれる分余裕があるのだがそれにしても島氏が遅い。いつも最後の最後まで決して諦めず最善を尽くす島氏の執念を見たような気がするが、かなり遅れて坂道を上ってきた彼は疲弊しきった様子である。今回は島氏の粘りに魚の方が応えてくれなかったのだろう。10時20分にバスが到着したのと同時に島氏も到着した。

審査結果

優勝	嵐 光博	1342点 (アブラコ345mm+カジカ 425mm+5720g)	エンドモ岬
準優勝	西川紘一	1274点 (アブラコ439mm+カンカイ299mm+5360g)	坂 岸
3位	吉井 博	1212点 (アブラコ378mm+カジカ 405mm+4290g)	西東洋三本岩
4位	前野達志	1114点 (アブラコ286mm+カジカ 416mm+4390g)	歌 露
5位	堀内正博	1074点 (アブラコ380mm+カジカ 344mm+3500g)	南 東洋
身長優勝	西 川	43,9cm (アブラコ)	坂 岸

7月の大会としては2回計りが4人出るなどカジカがよくあがった。優勝は、嵐氏であ

る。これで今年度4回の内3度目である。年間優勝から遠ざかっていた嵐氏の今年にかける執念を見た。嵐氏は「エンドモ岬でこれだけ釣れたのだから沖の島はもっと釣れているだろう。対抗は沖の島だけだと思った。」と話してくれた。そう評価してくれただけでも嬉しい気がする。とにかく夜半から一睡もせず磯を這いずり回った闘いが終わった。

三戸（さんし）の虫

庚申（こうしん）信仰というのがある。庚申は、十干（じっかん）の「庚（かのえ）」と、十二支の「申（さる）」の重なった日や年のことで、これは60をサイクルとして巡ってくるのだ。

この庚申信仰というのは、「その日は、徹夜すること」を教義にしている。その理由は、その夜に寝入ってしまうと、体内に棲んでいる三匹の虫が庚申の夜に体内を出て、天帝の所へ飛んでいき、その人の60日間の悪事を告げ口する。それをもとに天帝は、その人の寿命を伸ばしたり縮めたりするというのだ。したがって江戸の庶民達は、庚申塔などを建てて、真剣に護身を願ったそうである。庚申塔に、「見ざる・聞かざる・言わざるの三猿」が彫刻されているのは、三匹の虫への要望を込めた意味があるといわれている。又、庚申の夜は、夫婦の和合も慎むものとされていた。石川五右衛門の両親は、庚申の夜に和合したので、大泥棒の五右衛門が生まれたというのである。

私たち釣り会に所属するものは、徹夜は当然のことだろう。私も前日から釣り場に思いを馳せて眠れぬ夜を過ごし、睡魔が襲うはずのバスの中でも真剣に情報を掻き集め、夜の帳がすっかり落ちた夜半からごそごそと磯を這い回る。徒労に終わることの方が多いが、夜が明けてからも1匹の大物を求めてさらに移動を繰り返す。私の腹中に巣くう3匹の虫でさえ、私の非業を知らながらも昇天して天帝に告げ口することなど窺うことも出来ないだろう。釣果に悲嘆して、もしくは釣果に満足して磯の縁でコクリコクリと居眠りしている釣り人さん！「三戸の虫」には気をつけて！